真面目に嘘をつかない「モノづくり」

髙橋　誠（たかはし　まこと／東新プラスチック（株）代表取締役社長）

東新プラスチック㈱は昭和36年に設立し、今年で55年目を迎えました。設立当時は熱硬化性樹脂（熱をかけると固まる）を成形する会社として発足し、すぐに熱可塑性樹脂（熱で溶け、冷えると固まる）の部品製造を行うようになりました。

自社ブランドを持つメーカーを目指して

当時プラスチックはまだまだ一般的ではなく、販売価格も現在のように安価でなく、それは忙しく働いていたようです。私たちの会社がある八王子市は「桑の都」として栄え、シルク織物に代表される繊維産業のまちでした。

しかし、高度成長の波に押され、繊維産業の衰退とともに、プラスチック業界へ業種転換する企業もありました。そういった企業をわが社は支援し、協力関係を構築し「東新協力会グループ企業」として協業して仕事をしてきました。多くの仕事を集め、協力会社へ製造を委託し、当時のわが社の企業規模では成し遂げないような売り上げを計上していたと聞いています。

そのような時代ですので、どの業種も同じだったと思いますが、わが社も、環境問題への取り組みなどは皆無でした。環境よりはむしろ、多くのものづくり企業が「メーカー」を夢見て、自社製品を作り日々努力することに真剣でした。東新プラスチックもヘッドホンやマイクロフォンを自社製品として世に送り、米国メーカーにヘッドホンを国内メーカーにマイクロフォンをOEM供給をしていました。また自社ブランドでの販売にも力を入れ、メーカーへの道を歩み始めました。私は幼少のころから、東新プラスチック㈱をメーカーに育てることを夢見て働く父を見ながら育ち、自然とモノづくりの楽しさを身近に感じてきました。

小さなことから、こつこつと

私が東新プラスチック㈱に入社したのは、世間がまだバブル景気に踊っていた1991年の年末でした。オーディオ関連の部品（ヘッドホン、マイクロフォン、スピーカー）が主要生産品目で、生産品目数、売り上げも現在のそれを一社の得意先で賄えるほどでした。日々の生産や、お客様対応に日々追い立てられ、環境問題に対する取り組みは、まだ何も出来ていなかったように思います。

そのような中、町工場の東新プラスチック㈱で取り組んだのは、社内の「5S」からでした。整理整頓とは程遠い工場、成形機の周りには灰皿がおかれ、くわえたばこでの仕事、製造・販売の基本「先入先出（さきいれさきだし）」さえ「それなに？」という始末、始業のミーティングはお茶を飲みながら、「もう9時半過ぎてますよ」というような状態でした。かろうじて事務所は禁煙になっていました。そこへ何も世間をわかっていない、社長のドラ息子が入ってきたのですから、反発も激しかったのですが、やればやっただけ変わっていきますから、やりがいもあったと今は思います。

幸いドラ息子は、ドラ息子なりにお客様の生産管理システムを学ばせていただく経験や、青年会議所活動を通じて多くの経験と仲間を得ることが出来ました。その経験を持ち込み、社内の「無理」「無駄」「ムラ」の排除と社内の「直角・平行」化を推し進めました。

バブルが崩壊し、既存顧客の工場は、海外移転が進み、東新プラスチック㈱は冬の時代が続きます。このまま衰退しては会社の存続をも危ぶまれる事態がやってくるのも、そう遠いことではないと、危機感を持つように思う頃でした。仕事のやり方、受け方を変え、質の良い利益を追求するように舵をきりました。それに伴い設備も更新しました。その結果、製品の品質も安定し、お客様の信頼も得られるようになり、設備投資も順調に行えるような好循環が生まれました。

設備を整え、環境力を鍛える

全ては、お客様に喜んでいただける製品をお届けしたいとの思いで、設備投資、作業環境、製造工程の改善、見直し、更新を行ってきました。そして、その製造にあたる東新プラスチック㈱のメンバー全員が、その使命に向かって同じベクトルで進める様に環境を整備してきました。

初めは、自分たちの現状で出来る省エネや、節約、改善を行ってきました。お客様の品質要求レベルが上がることを念頭に、なるべく先回りして改善するように心がけ、実践していきました。そして、東日本大震災をきっかけに、消費電力の問題や、環境配慮への意識が大きく変わっていきました。意識して皆が取り組むと、その意識は伝染して、増幅していくように思います。

その後その成果をもとに新工場を立ち上げ、稼働しました。その結果、更新できるものは最新の設備に更新し、ソーラー発電、LED照明の導入、材料の無乾燥化、全館作業エリアの空調化、クールビズの導入と進みました。気が付けば環境に配慮した、働くにも製品にも優しい会社になりつつあるようです。リサイクル、リデュースも手段ではありますが、最新の設備に更新したことで、見えない省エネの達成や、無理無駄の整理が出来ています。今はその環境を維持し、継続的に改善できる陣容の充実が会社の財産になってきています。

この改善の積み重ねの結果、このような経営者「環境力」大賞を受賞することが出来たのだと思います。一緒に働くメンバー、お得意様、また関係するすべての皆さんに感謝です。ありがとうございました。

最新設備を備え、環境に配慮した働きやすい工場